「第 49 回県母と女性教職員の会」講演会報告

子どもに「愛のシャワー」を！自己肯定感を育てる

野口克海さん（大阪教育大学監事）講演より

今なぜ「母女」が必要なのか

・　母親の子育て力が落ちてきたのではない。地域力の低下、少子化、核家族化などにより、お母さん応援団が少なくなり、孤立化することが多くなった。不安、イライラが多くなる。

県母女資料＜基調＞から

『私は今一生懸命に子育てにがんばっている。でも、朝から晩まで、幼い子どもとの世話と家事に明け暮れて、ふと、鏡に映った疲れきった自分の顔に、自然と涙が出てしまう。月曜日から日曜日まで、私には休みがない。夫は子どもと私のために、色々と大変な思いをしてよく働いてくれている。夜も帰りが遅く、休みの日もほとんど家にいない。よくわかっている。ありがたいと思う。でも･･･少しでいい！おしゃれもしたい！少しだけでいい！自由な時間がほしい！人は言う。「子どもは 3 歳までは母親が育てなければいけないよ。それが当たり前だよ」「我慢しなくちゃ。みんなそうやって来たのだから」「そんな自分勝手なことばかり言って･･･。」もう･･･つぶれそうなのに、誰もわかってくれない。ゆっくり夫と穏やかな気持ちで話したのはいつだろう。ずっと昔のような気がする。今日も涙があふれる』

・　（何かあってから家庭訪問するのではなく、普段から行う）「軒下家庭訪問」のすすめ。
今日行くから「教育」。「告げ口家庭訪問」はダメ。「お母さんも大変ですね」と、**まずは共感**。「共にがんばりましょう」というのが、家庭訪問の基本。教師と家庭が手をつなぐこと。

・　子育てや教育は個人の責任ではない。社会の問題。みんなで考えていきましょう。
・　同行二人、**同じ方向を向いて一緒に歩いていく**のが教育。子育て。

子どもにどんな力をつければいいのか

・　生活のリズムをとりもどすことから。
・　子どもの自治の力をつけること。教員が押さえつけていてはダメ。
・　**「自己肯定感」**を育てる。「あなたが大事よ」「あなたが好きよ」「こんなにいいところがあるよ」
・　人間は必要とされることで生きる力が湧いてくる。がんばれる。子どもに「愛のシャワー」を。

「学力」とは

・　自分の脳みそで考え（思考力）、自分で判断し（判断力）、自分の言葉で語る（表現力）。
・　子どもが半分を語る授業への転換を。「分かりましたか」「覚えましたか」「できましたか」という授業はダメ。

感想から

１つ１つの話が“うんうん”とうなづけ、とてもわかりやすい話で全て感動と自分なりに勉強になりました。子どもと向き合うのではなく、横に並んで一緒に手を取り合いがんばろうという気持ちが大切だとおもいます。（母）

とてもすてきな講演でした。“子どもを好きになるという教育の原点”忘れそうな日々の中ではっとさせられました。明日、授業で出会う子どもたちに「好きよ」光線を発したいと思います。お母さん方をさそえばよかったとまた、後悔しています。元気をもらいました。（教）